

イタリアにおける視覚障害者のための 「手でみる絵」の取組とその普及

大内 進*・藤原 紀子**

(*国立特別支援教育総合研究所客員研究員) (**国立特別支援教育総合研究所外国調査研究協力員)

要旨：イタリアにおける視覚障害者のための手でみる美術館の最近の取組及びイタリア国内における視覚障害者のための美術鑑賞の普及について把握するために、視覚障害者のための手でみる美術館「アンテロス」を訪問し、聞き取り調査した。その結果、「手で見る絵」鑑賞に熟達した視覚障害者が育成されていることやインクルーシブ教育体制下で学校教育機関への積極的な支援が行われていること、近年イタリア国内の美術館において「手で見る絵」の普及が進んでいることが把握できた。

見出し語：手でみる絵，視覚障害，美術教育，触察

I. はじめに

視覚活用に制約のある人々が、視覚芸術である「絵画」を鑑賞することには当然困難が伴う。しかし、我が国を含めて、視覚に障害がある人からの絵画鑑賞のニーズの要望は少なくなく、そうしたニーズに応えるための取組が様々な方法で行われている（ジュリア・カセム，1998）。一般的に行われている視覚障害がある人のための絵画作品鑑賞法は、ガイドによる言語的解説が中心で、補助的に凸図などが利用されている。こうした方法によって、絵画が表している内容を感じとることができるものの、この方法では絵画に表されている空間構成や絵画の有する構造的性質までを明らかにすることは困難である。

イタリアでは、視覚に障害がある当事者の方や盲人団体の尽力によって、視覚障害者が芸術を享受するための専門の美術館が開設されている。その一つが「手でみる古典・現代絵画美術館『アンテロス』(Il Museo tattile di Pittura antica e moderna Anteros, 以下「アンテロス美術館」)である。この美術館の取組については、これまでも筆者らが紹介してきており(大内，2004)，アンテロス美術館と共同で、視覚障害者のための絵画を半立体的に翻案した作品の活用やその指導法の開発にも取組んできている。本稿で

は、科学研究費補助金による研究の一環として実施した訪問調査及びこれまでの調査活動において収集した資料を整理して、最近のイタリアにおける「手でみる絵」の開発やその鑑賞指導の取組及びイタリア国内への普及状況について報告する。

II. 調査の目的と方法

1. 目的

イタリアにおける視覚障害者のための手でみる美術館の取組について、以下の観点から資料収集を行った。

- ①視覚障害者に対する2次元画像を半立体的に翻案した手でみる絵の開発及び鑑賞指導に関する資料収集
- ②イタリア国内における視覚障害者のための美術鑑賞への取組の最新情報の収集

2. 方法

期間中に、当美術館学芸員、スタッフ、ボランティア、ボローニャ大学教員等の関係者へのインタビュー及び資料収集を行った。

- ①調査期間：2013年6月30日(日)～7月7日(日)(8日間)

②訪問先：カヴァッツァ盲人施設・視覚障害者のための手でみる美術館「アンテロス」（ボローニャ）

Ⅲ. 調査結果

1. アンテロス美術館における「手で見る作品」の開発と鑑賞指導

1) アンテロス美術館について

アンテロス美術館は、エミーリ・ロマーニャ州のボローニャ市内にあるカヴァッツァ盲人施設内に開設されている。「アンテロス」美術館の構想は1994年に打ち出され、ロレッタ・セッキ学芸員等を中心に、視覚に障害がある人々と共に、ボローニャ応用彫刻研究所、ボローニャ大学及びサント・オルソラ病院視覚病理科のスタッフの協力を得て、触覚を活用したより効果的な鑑賞方法について研究が開始された。この結果として開発されたのが、「浮き彫り」の技術を活用して平面的な絵画を半立体的に「翻案」し、それと言語による説明を組み合わせることで絵画を鑑賞する方法である。このような着想のもとに、当美術館は1999年に誕生した。「モナリザ」、「ヴィーナスの誕生」などイタリアのルネッサンス期の作品を中心に古代から現代まで50点余りの絵画翻案作品が収蔵されている（大内，2004）。

2) 「手でみる絵」の作品翻案の基本原則

絵画を「手でみる絵」へ翻案する際の基本原則は、絵画に描かれている3次元空間の層化と事物の圧縮した立体表現および触覚的特性に考慮した形状のデフォルメの3点に整理される（大内・土肥・セッキ，2006）。特に事物の圧縮的表現と3次元空間の層化の原理は、2次元の絵画に描かれている立体感、奥行き感、遠近感の再現に不可欠だといえる。

(1) 圧縮による表現

圧縮による表現とは、平面絵画に表された事物（2次元）を実際の空間イメージ（3次元）ととらえなおし、それを正面から一方向に圧縮して扁平に変化させることで半立体の空間として再現することを意味している。原画の中で最も強調したい形態につい

ては、より立体的に表現し、輪郭部は単に浮き上がらせるだけでなく、背部は手指が入るようにくぼませている。

(2) 層化による表現

層化による表現とは、平面絵画に表された3次元的な遠近の違いをいくつかの層に切り分けて再現することである。たとえばレオナルド・ダ・ビンチ作の「モナリザ」は空気遠近法描写に優れた作品といわれているが、「手でみる絵」への翻案にあたっては、絵画に表された空間を近景の人物と背景の景色を触覚的に認知しやすいように層化して表現する。これにより、奥行きをより明確に表すことが可能となるのである。

(3) デフォルメ

絵画作品の半立体的翻案に際しては、基本的には原作品に忠実に再現することを原則とするが、原画通り表すことによって、触覚的認知の妨げになってしまうような場合もある。例えば、ボッティチェリ作「ヴィーナスの誕生」には画面全体に花びらが舞っている。これらを忠実に半立体画像に表現してしまうと、それがかえって人物や景色をとらえようとする際のノイズになってしまうのである。そこで舞い散る花びらについては、鑑賞の妨げにならない部分を中心に表すように配慮した方がよいということになる。こうした場合は必ず言語的な説明で補足することになる。

3) アンテロス美術館における作品鑑賞指導

(1) 作品の鑑賞指導

「手でみる絵」を用いた視覚障害者による絵画作品の鑑賞は、原則として作品目録に従って進められる。アンテロス美術館では、触覚活用による鑑賞ガイドを3段階に区分している。第1段階では、指導者が手を添えて導くタッチガイドが中心になる。第2段階では、鑑賞者が主体となって鑑賞を進めるが、必要に応じて指導者が介入する。準タッチガイドの段階ともいえる。第3段階は、直接手指を導くことはなく、指導者からの言語による情報（オーラルガイ

ド)を基に、自身で自立した鑑賞を進めることになる (Secchi, 2004)。

このようなプロセスで作品と向き合っていくことが原則となっているが、子どもと成人では知識量や社会経験が異なっていることや、視覚に障害がある人の場合はそうした面での個人差も大きいことから、実際の指導では、鑑賞者一人一人の実態をふまえて柔軟に対応しているということを確認した。

(2) 作品鑑賞と複製制作による認知の確認

視覚に障害がある人の場合、鑑賞という受け身の活動だけでは、表現されている内容を十分に理解することが困難であることから、アンテロス美術館では、鑑賞後、触った作品を粘土で模写するという表出活動を取り入れている。その事により、鑑賞では曖昧だった部分を明確にし、理解を深めていくことが可能となる。

作品の認知レベルは、鑑賞者の自立性の程度ともかかわっている。この自立度を確認するためにも、粘土で複製するという作業が役立つということであった。

(3) 自立度の高まった鑑賞者の例

今回の聞き取りにおいて、これまでの取組で高度の鑑賞力を身につけた鑑賞者の事例について把握することができた。以下に簡潔に紹介する。

①事例A

A氏は、中途視覚障害で現在は全盲になっている。1997年にカヴァツァ盲人施設の電話交換手の養成コースに入学し、その当時からこの美術館にて美術史と浮彫の鑑賞を学んできた。A氏によると、視覚だけでなく触覚も活用した絵画鑑賞は、日常生活における空間把握に役立ち、また視覚活用の制約による精神的不安を鎮めるのに貢献したという。この美術館での経験を通じて多くの視覚的記憶を回復しつつ、さらに新たな知識を獲得し、芸術理解の有益性を痛感しているということであった。現在、A氏はアンテロス美術館にてボランティアの鑑賞ガイドとして活動している。

②事例B

B氏は先天盲である。ボローニャ大学教育学部の

学生の時に、アンテロス美術館と出会った。B氏は幼少期から、美術に理論的・観念的に親しんできたという背景があり、高校では芸術理論の歴史的・哲学的意義を学び、大学に進学した。そして、当美術館を訪れたことによって、絵画に描かれている形体の知覚と解釈をはじめ美的体験において結びつけることができた。

B氏の浮彫作品に対するアプローチは非常に体系的である。ガイドを伴った鑑賞ののち考察をレポートとしてまとめ、それから独りで再び鑑賞を行い、第二のレポートで自らの知覚の一貫性、すなわち記憶について確認するという具合である。

③事例C

C氏は、網膜疾患により重度の弱視に陥った中途障害者である。視力の低下から触覚活用の必要性を感じ、2001年より当美術館に通っている。初期のころは、触覚による鑑賞には困難を感じたが、芸術作品を知り知覚の多様性を体験することは精神的な安定材料となったという。ここで生まれた自覚から、残存視力を使いつつも、触覚を鍛えていくことに積極的になった。単に必要性からではなく、多くの可能性のために触覚教育に臨んでいる。彼は作品の鑑賞において部分的な視覚的イメージに触覚的イメージを継ぎ足す作業を行っている。鑑賞を順序立てて行い、そこで獲得した認識枠組みが日常生活にもよい影響を及ぼしているという。

(4) 学校教育機関等との連携

当美術館は学校教育機関とも連携して、美術教育に関して視覚に障害がある児童生徒への支援を行っている。視覚に障害がある学生への対応では、各学校の教育課程や単位認定について、在籍する学校の担当教員等との合意の上で連携している。その対象は幼児から大学生にまで及んでいる。また、インクルーシブ教育や視覚障害者の社会的・職業的統合という目的の共有という点にも配慮しており、特に、小・中学校への美術教育の支援では、視覚障害がある児童・生徒だけを対象とするのではなく、視覚に障害がある児童生徒が在籍するクラス全員がこの美術館を訪問して、共にタッチツアーを体験したり、年度による模写活動を行う機会も提供したりしてい

る。写真1はその一コマである。また、近年は、単一の視覚障害だけでなく、重複障害や聴覚障害のある子どもに対してセラピーを兼ねた絵画鑑賞指導にも取り組んでいる。さらに、ボローニャ大学の支援も得て、視覚に障害がある子どもの保護者の会を組織していることも当美術館の大きな特徴だといえる。絵画の鑑賞とともに視覚に障害がある子どもの教育に関連したいくつかの問題に対して、母親や父親に実用的な情報を提供したり、問題の解決に向けた機会にしたりしているということであった。



写真1 小学校の児童による「手でみる絵」の鑑賞指導の一コマ

を中心とするボローニャエミリア学派の絵画も多数展示されている。写真2に示した『聖ゲオルギウスの竜退治』（1350年頃作、テンペラ、88cm×70cm）は、ヴィターレ・ダ・ボローニャの代表作品であり、この美術館の代表的な所蔵作品の一つでもある。アンテロス美術館では、『聖ゲオルギウスの竜退治』を手でみる絵に翻案しており、その翻案作品が、ボローニャ国立絵画館の原画展示場所の近くに常設展示されている（写真3）。

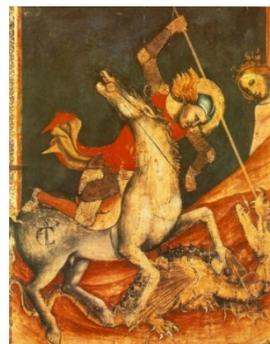


写真2 ヴィターレ・ダ・ボローニャの「聖ゲオルギウスの竜退治」（左）

写真3 ボローニャ国立絵画館に展示されている翻案作品（右）

2) 「手でみる」絵画作品の開発とイタリア国内での普及

近年、イタリアでは、当美術館の取組が、他の美術館での視覚に障害がある人のための絵画鑑賞への支援や、美術館が所蔵する絵画の半立体的翻案へと発展してきており、支援活動についても積極的に取り組んでいる。その背景にはイタリア盲人協会の努力もある。以下に、今回の調査で得られた新たな情報を基に他の美術館での「手でみる絵」の開発やその普及について報告する。

(1) ボローニャ国立絵画館での手で見る絵の常設展示

ボローニャ国立絵画館は、18世紀末にナポレオンによって廃止されたボローニャの教会や修道院から集められた絵画や彫刻がコレクションの基盤となっている美術館である。この絵画館には、14世紀の画家、ヴィターレ・ダ・ボローニャ（1309頃～60頃）

(2) マントヴァ・テ宮殿市民美術館 (il Museo Civico di Palazzo Te) における手で見る絵の展示

テ宮殿 (Palazzo Te) は、イタリア北部、ロンバルディア州のマントヴァ市の郊外にある。16世紀にマントヴァ公であるゴンザーガ家のフェデリコ2世により夏の離宮として建造された建物で、設計はジュリオ＝ロマーノである (Bazzotti, 2004)。2005年に、マントヴァ市は、イタリア遺産省の文化活動の一環として、視覚、聴覚、身体などに障害がある人も積極的に文化を享受することを目的として「障壁のない文化」(La cultura senza barriere) と題したプロジェクトを実施した。その一環として、テ宮殿の美術作品への視覚障害者の鑑賞のアクセスが検討され、「アンテロス」美術館が触る絵の製作に全面的に協力した。テ宮殿には30の部屋があるが、そのうちの「巨人の間」の作品例を写真4に示した。

また、「巨人の間」については、絵画が壁や天井な

どにぎっしりと描かれているため、その状態を触覚によって観察、確認できるように、部屋の模型も作成されている（写真5）。



写真4 「巨人の間」の天井に描かれている作品（左）とその浮彫翻案作品（右）



写真5 壁や天井のペインティングの状態の理解を促すための「巨人の間」の模型

（3）ウフィッツィ美術館における手でみる絵の常設展示

フィレンツェにあるウフィッツィ美術館（Galleria degli Uffizi）はメディチ家歴代の美術コレクションを収蔵する美術館であり、イタリア国内の美術館の中でも収蔵品の質、量ともに最大級の世界的に著名な美術館である。展示物は2,500点にのぼる。古代ギリシア、古代ローマ時代の彫刻から、ボッティチェリ、レオナルド、ミケランジェロ、ラファエロらイタリアルネサンスの巨匠の絵画を中心に、それ以前のゴシック時代、以後のバロック、ロココなどの絵画が展示されている。

このウフィッツィ美術館においても、視覚に障害がある来館者のための取組が実現した。当美術館の主要な所蔵作品の一つであるサンドロ・ボッティチェリ作の「ヴィーナスの誕生」（写真6）の浮彫翻案作品が、2011年10月5日から、原画の隣に展示されるようになったのである（写真7）。この翻案作品と

ともに点字による解説パネルも掲示されており、さらに音声ガイドと組み合わせることによって触覚を活用した効果的な鑑賞ができるようになっている。この翻案作品も「アンテロス美術館」が開発作成したものである。



写真6 「ヴィーナスの誕生」原画



写真7 「ヴィーナスの誕生」浮彫翻案作品

（4）サンタ・マリア・デレ・グラッツィエ教会における「最後の晩餐」の手でみる絵の常設展示

ミラノ市内にあるサンタ・マリア・デレ・グラッツィエ教会の旧食堂の壁に描かれている『最後の晩餐』（L'Ultima Cena）は世界で最も有名な絵画の一つである。レオナルド・ダ・ヴィンチが描いたこの作品も手でみる絵に翻案されて旧食堂内に展示されている。この作品は、キリスト教の聖書に登場するイエス・キリストの最後の日に描かれている最後の晩餐の情景を描いている。ヨハネによる福音書13章21節より、12弟子の中の一人が私を裏切るとキリストが予言した時の情景である。レオナルド・ダ・ヴィンチが、パトロンであったルドヴィーコ・スフォルツァ公の要望に応じて、サンタ・マリア・デッレ・グラッツィエ修道院の食堂の壁画として描いたものである。絵の大きさは、420 cm（高さ）×910 cm（幅）に及ぶ。1495年から制作が開始され、1498年に完成

した。

この『最後の晩餐』は、現在もサンタ・マリア・デレ・グラッツィエ教会内の旧食堂の壁に描かれており、一般公開されている。アンテロス美術館では、これを手で見る絵に翻案した（写真8）が、この作品が描かれている旧食堂内にも、視覚障害者のために「最後の晩餐」の浮彫翻案作品が置かれている（写真9）。



写真8 『最後の晩餐』の翻案作品



写真9 『最後の晩餐』展示室に置かれている翻案作品

IV. 考察

現在、イタリアには、視覚障害者のための美術教育や鑑賞を目的とした美術館が2館存在する。彫刻、建築等を主に収集展示しているアンコーナの「国立触覚美術館“オメロ”」と、絵画を扱っているアンテロス美術館である。同じ触察でも彫刻、建築などの3次元のものと絵画のような2次元の情報ではその扱い方が異なってくる。そのため、筆者らは視覚に障害が在る人々への絵画の紹介では、絵自体の鑑賞に留まらない工夫を試みているところであるが（大内、2008）、今回の聞き取り調査でアンテロス美術館では、基本的に当初の指導法を踏襲していること、

また、作品理解の確認のために粘土等による複製制作に取り組んでいることを確認することができた。こうした実践の積み重ねの結果、触察については自立度の高い熟達した鑑賞者が育っていることも確認することができた。イタリアでは、社会的統合の考え方が浸透していることもあって、視覚に障害が在る人々の絵画の鑑賞については、一般の人々も当事者も好意的積極的であるようにとらえられた。

翻って我が国では長らく視覚障害教育が盲学校中心に据えられてきたこともあって、絵画の鑑賞は、熱心な美術科教員のいる学校で取組まれていることはあっても、一般的にはほとんど関心を持たれていないというのが実情である。しかしながら、視覚障害者に絵画は無関係かという必ずしもそうとは言えない。日常生活の会話や小説、新聞記事、ドラマ、演劇等のメディアの中でも絵画に関連する話題は頻繁に扱われている。視覚活用の制約の有無にかかわらず、程度の差はあってもそうした話題に対応できるか否かは、生活の質の向上と大いにかかわってくるであろう。こうした観点から日伊の比較検討をさらに進めていく必要があるといえる。

また、これらの美術館の最終目的は、美術館の来館者へ完成された美学教育を提供することであり、視覚に障害がある子どもとその子どもが在籍する学級を対象とした美術教育面での支援やサービスが含まれていることも確認できた。学校でのインクルーシブ教育に貢献しようとしていることは関係機関の連携という観点からも興味深い。

さらにイタリア国内では、これら二つの専門的な美術館の取組が広く浸透しつつあることの反映か、一般の美術館でも積極的に対応する機運が高まってきたことも確認できた。本稿では、最近のトピック的な四つの美術館の取組を紹介した。その他に、トリノのエジプト美術館、ヴェネツィアのコレル美術館、フィレンツェのドゥオーモ作品美術館、マリーノ・マリーニ美術館、ミラノのドゥオーモ美術館、ボローニャの市立中世美術館といった美術館でも、視覚に障害がある人々が利用するための教育サービスの提供が始まっているという情報を得た。また、イタリア以外の国でも、例えばルーブル美術館、メトロポリタン美術館、ボストン美術館なども積極

的な対応をしている（大内，2004）。我が国ではトップレベルの美術館でさえも胎動は感じられるものの組織的な取組の機運を認めることができない状況にある。こうした点からも今回の調査で得た情報の意義は大きいといえる。今後も情報収集に努力し、生活の質の向上という観点から「絵画」への対応に関する検証を進めていきたい。

付記

本調査は、科学研究費補助金（基盤研究（C））「2次元画像から3次元空間理解を促すための障害児教育用教材の開発と活用に関する研究」（研究課題番号：24234567，研究代表者：大内進）によって実施されたものである。

引用文献

- Bazzotti, U. (2004). Palazzo Te a Mantova. Sukira.
 ジュリア・カセム (1998). 光の中へ：視覚障害者の美術館・博物館アクセス. 小学館.
 大内進 (2004). 3次元造形システムを活用した視覚障害児のための絵画の立体的翻案とその指導法の開発(平成14年度～16年度). 科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書. 国立特別支援教育総合研究所.
 大内進, 土肥秀行, ロレッタ・セッキ (2006). イタリアにおける視覚障害児者のための絵画鑑賞の取組. 世界の特殊教育, 20, 83-99.
 大内進 (2008). 視覚障害教育のための3次元CADを活用した2次元画像の立体的翻案に関する研究(平成17年度～19年度). 科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書. 国立特別支援教育総合研究所.
 Secchi, L. (2004). L'educazione estetica per l'integrazione. Carocci Faber.

参考文献

- Bellini, A. et al. (2000). Toccare l'arte: L'educazione estetica di ipovedenti e non vedenti. Armando.
 日野あすか (2005). 日本の盲学校の美術・造形教育の実態調査. 美術科教育学会誌, 26, 319-330.
 Museo tattile statale Omero (2006). L' arte a portata di

mano. Armando.

大内進 (2009). イタリア・フランス視察記(2) イタリアにおける視覚障害者のための触る美術館の取り組み. 視覚障害, 252, 22-30.